ＴＯＫＹＯ美人と、東京１００ストーリー

新妻の悩み　③後編　連載・完了（００３　隅田川）

穂高健一

「複雑なことはシンプルに考える、これがセオリーだ。問題を絞り込めば、黒船来航の一点につきる。母親の黒船を東京湾に入れないで、静岡沖に押しとどめることだ」

「実家は静岡といっても、富士山ろくの方です」

「海辺でなく、山側か。それがポイントになりそうだな」

観光船が隅田川の河口までやってきた。目のまえの岸壁は、都民の台所、築地魚市場だった。運搬漁船が二隻ほど接岸している。明朝には仲買人がセリする、遠洋の魚が水揚げされているさなかだろう。

「会社では、いまどんな企画に取組んでいる？」

「年末から手がけているのが、クライアントは大手菓子メーカーで、動物園とタイアップした、桜シーズンの企画です」

その企画内容は、園児30人を動物園に招き、子ヤギとか、ウサギとか、ロバとかと母子でいっしょに遊ぶ。菓子5個についた応募券による、抽選だという。ＴＶ局がかむように、いま交渉中しているさなかだと説明した。

「ここは動物園ストーリーで、いくとするか。まず母親には、大手広告代理店に勤務する、息子の俊男がいま動物園の宣伝広告を受け持つ、と知らしめる」

「それは電話で、話せます」

「動物園が倒産し、手形が不渡りになった。大変なんだ、きょう動物園から現物で、準天然記念物のヤギの、オス、メス２頭を担保に押収してきたと話す。考えてみたら、準天然記念物のヤギは、文化庁に届出された特定場所しか飼えない。富士山ろくの実家を届出にするから、お袋が世話してほしい、ともちだす」

「母は、ボク以上に動物嫌いです。頭から反対しますよ」

「かわいい一人息子のたのみだ。台場から美紀は出て行った、ボクが会社を休んでまで、ヤギを飼えないといえば、母親は断りきれないさ」

これは準天然記念物のヤギだ、ぞんざいに扱うと、法律で罰せる。母自身が世話してくれ、と富士山ろくにトラックで運び込む。文化庁には飼育日誌の提出義務がある。1日3回かならず書いてほしい。

「嫌がるだろうな」
「他人に任せた場合、飼育日誌が面倒になって殺して、ヤギ肉として食べられたりすれば、ボクの一生に傷つく。刑事罰で、前科がつく。ここはお袋しか頼めない。そうすれば、天然記念物のヤギの世話で、姑は東京行どころじゃなくなる」
「しかし？　準天然記念物のヤギは実際どこで入手できるですか？」
　俊男の顔には、実行不能という表情が浮かんでいた。
「それは実にかんたんさ。奥多摩にいけば、道端で草でも食べている、農家のヤギがいる。金に糸目をつけなければ、農家で明日にでも買える。それを富士山ろくに届ける」
「やってみます」
「いい加減なヤギでも、準天然記念物だといわれたら、静岡の母親は信じるさ」
「いい加減な性格は、もめ事には重宝なんですね」
　美紀が微笑んだ。
「長所と短所は裏表さ」
「動物嫌いの義母さんが、なんだか可哀そう。子ヤギが産まれたら、それこそ毎日がたいへんで」

「同情は禁物」
「夫は承諾したんですね」
「もちろんだ。美紀との仲がとり戻せるならば、明日にでも、心当たりがある、イベント用の動物をあつかう業者からヤギを買って、トラックに同乗して実家に運び込む。飼育日誌は書かせる、と」
「夫は実行力があります。しごとでも一度決めたら、スピードは速いものがあります」
「企画力、アイデアにはやや難点がある」
「いい加減さんとは違いますもの」
「主人には期限をつけた」
「いつですの？」
「一週間後の、きょうだ」
「今日……？」
「母親から文化庁に一度目を通してもらうからといい、飼育日誌を借りてくる。日の出桟橋発、14時40分の台場行の観光船に乗り込んでもらえば、ヤギの飼育日誌と引き換えに、奥さんの身柄を引き渡す、と合意した」
「身柄の引渡しだなんて、人身売買みたいでイヤです。お断りします」
　彼女が怒った。
「ことばの弾みだよ」
「ぜったいイヤです」

彼女はガマンならない態度だった。
「人身売買はことばのあやだ」
「そのような解決方法、たのんだ憶えはありません。わたしは次の日の出桟橋で下船します。夫と会っても、口を利かずに帰ります」
観光船が水門を通り、浜離宮（はまりきゅう）の桟橋に接岸した。日本庭園は外国人に人気があるのだろう、大半が下船していく。
「この場に及んで、最後の伏兵がいただなんて。母親はヤギの飼育で、静岡にまちがいなく釘づけにできる。一発大逆転、円満解決、われながら良い解決法だと思ったのに……」
井伊は当惑してしまった。
「事前に、わたしには一言の相談もなかったでしょ。いい加減さんが、夫を乗せて、勝手に仕組んだ、筋書きでしょ。浅草のジャズ喫茶店でも聞いていません」
「ご主人と話しているうちに、動物ストーリーがうまれた」
観光船の汽笛が鳴った。しずかに出航していく。あと5分で日の出桟橋についてしまう。
「きのうのわたしの電話でも、夫に身柄引き渡しなんて、一言も聞いていません」
「喜びは先延ばしに、と思ったから」
「これが喜びですか。飼育日誌一つで、夫の下に引き渡される。見えない手錠で縛られているようなものです。いい加減さんを見損ないました。もう離婚問題はたのみません。きょうかぎりです。やって良いことと、悪いことがあるでしょ」
彼女がそっぽをむいた。その視線の先にはレインボーブリッジが横たわる。消防艇、貨物船、豪華な客船などが周辺を行きかう。
「こんな強い気性の新妻だと、ご主人のほうに味方したくなった。こうなったら、実家にヤギを送り込ませた、徒労の罪滅ぼしに、再婚相手の女性でも探してやるか」
「ご自分のほうこそ、考えられたら。雅美さんと離婚した後の、再婚相手を」
「ボタンのかけ違いか」
「わたしにもかけ違いがあります。年末の鳳神社の酉の市で、いい加減さんの裏稼業はどうも変だ思い、ネットでもう一度確認しましたら、裏稼業人は『セーフティー池袋支社』という警備会社の支社長でした」

「いまさら、警備会社とスーパーと、まちがったといわれてもな……」
「ネットで、セーフティーの住所を調べて池袋に行きました。女は地図に弱いというでしょ。池袋は西口が東武鉄道、東口が西武鉄道でしょ。それで迷ったみたい」
彼女は『セーフティー』を探しているうち、目のまえに、『セーフティー池袋店』があった。疑わずに店に入り、ハムギフトを台場公園宛にたのんできたのだという。
船内放送が、日の出桟橋到着の案内をはじめた。入港の汽笛が鳴った。桟橋と陸地に架けられたブリッジの屋根がみえる。その屋根に邪魔されて、乗船待ちの客の姿は確認できない。
「人身売買の対象になるなんて、わたし生涯の心の傷になってしまいます」
「臨機応変に対応した、と理解して欲しい」
「失言をはっきり取り消してください」
「ただいまの発言について、誤解を生じる面がありましたので、深く陳謝し、失言を取り消します」
井伊は深ぶかと頭を下げた。顔を上げると、政治家みたい、と彼女が微笑む。
「わたしの方は、いい加減さんの奇抜なアイデアに感謝します」
「なんだ。怒ってないじゃないか」
「いい加減さんのまえで、離婚、離婚と騒いでいたでしょ、すなおに夫に会えると、喜ぶには照れくさかったの。一瞬にして胸が熱くなったから、それを冷やしていたの」
といってから、美紀の顔がぽっーと赤くなった。
「ひとが悪いな」
「小ヤギが産まれたら、可愛いでしょうね。わたし、静岡に手伝いに行こうかしら」
接岸する観光船の船首の角度がかわってきた。
「ほら、ご主人が来ているぞ」
桟橋に立つ俊男の姿が確認できた。その手には鳥かごを持つ。
「いい加減さん、ありがとう。涙が出るくらい、うれしい」
感極まった彼女が指先で、目もとをぬぐった。解決の涙をみた井伊も、心を打たれて、胸がじーんと熱くなった。
桟橋に立つ俊男が、こちらを見つけたようだ。鳥かごを高く掲げている。止り木の鳥が黄色いインコだと確認できた。船員がロープを投げた。
「この観光船で、ご主人と台場まで行きな。不足の料金は下船のときに精算すればいいんだから」
「井伊さんも、いっしょに台場に来てください。マンションで料理を作りますから」

「きょうの祝杯は、幸せな新婚さん、ふたりだけのほうがいい」
観光船が接岸すると、俊男がブリッジから乗り込んできた。ふたりは無言で見つめ合った。どちらから言葉をかけるか。一瞬のためらいがあった。
「インコは美紀へのプレゼントだ。お詫びかな」
「あなた、ごめんなさい」
美紀が両手で俊夫に抱きついた。インコを床におろした俊男が、あらためて嗚咽する妻を抱きとめた。
井伊はふたたび胸が熱くなった。
「再会って、いいものだな」
そう呟きながら、観光船から桟橋に降り立った。出航の汽笛が鳴った。
「いい加減さん、こんど台場に……」
「あばよ」
かれは背を向けて、コートの襟を立てた。　【了】

写真協力・モデルは、福本恵子さん（国際イメージコンサルタント）

【協力者と提供者は、本文といっさい関係ありません】